

Title	高野山六角経蔵の四天王像について：仏師快慶の新資料
Sub Title	Kaikei's Virupaksa from the Four guardian Kings in the Rokkakukyozo hall in The Kongobuji
Author	西川, 杏太郎(Nishikawa, Kyotaro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.181- 188
JaLC DOI	
Abstract	There are few Deva-type statues among existing more than twenty works done by Kaikei, a famous sculptor of Buddhist images In the Kamakura Period. However, we have recently found that Virupaksa, one of the Four Guardian Kings in the Kongobuji-temple in Mt. Koya, was made by Kaikei in his early ages. The present article discusses the Four Guardian Kings, inter alia Virupaksa.
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0187">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0187</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 高野山六角経蔵の四天王像について

— 仏師快慶の新資料 —

## **Kaikei's Virūpākṣa from the Four Guardian Kings in the Rokkakukyōzō hall in The Kongōbuji**

西 川 杏太郎  
*Kyotarō Nishikawa*

### Résumé

There are few Deva-type statues among existing more than twenty works done by Kaikei, a famous sculptor of Buddhist images in the Kamakura Period.

However, we have recently found that Virūpākṣa, one of the Four Guardian Kings in the Kongōbuji-temple in Mt. Kōya, was made by Kaikei in his early ages.

The present article discusses the Four Guardian Kings, inter alia Virūpākṣa.

### 1.

高野山金剛峯寺の霊宝館には古くから二具の四天王像が出陳されている。この内の一具は一木彫成の素地像で、平安後期の地方的作例とみられるものであるが、もう一組は、鎌倉時代の正統を襲う佳作である。この四天王像4軀のうち広目天像の左足柄内側に仏師快慶の刻銘があることは既に一部では知られていたが、近世補加された銅製の不似合な宝冠や、後補の天衣、あるいは全身を覆う補彩などのもいせあって、本像が快慶の作品



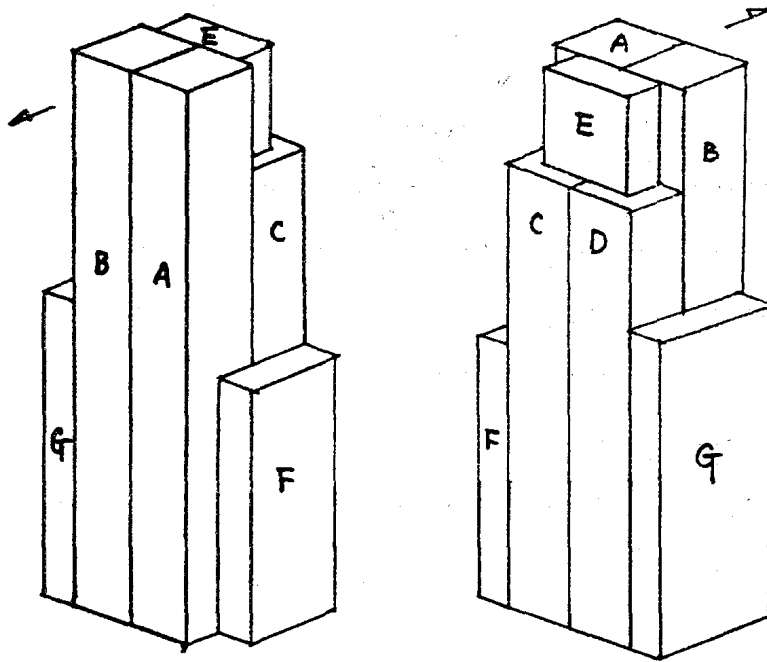
広目天像

であるか否かについての検討も特に行われ<sup>ない</sup>まま現在に至っている。

所で本像は近時、経年の自然損傷が甚しくなったため、さる昭和40年度に解体修理が行われ、銘記を有する広目天像の頭部内から、あらたに墨書の紙片が発見され、この像が快慶の作品であることが、ほぼ確認されるに至った。この修理とその結果については既に報告を行<sup>っ</sup>たが、ここに改めて本像、特に快慶銘のある広目天像についてその概要を紹介し、私見を述べようとするものである。

## 2.

広目天像は像高135.2センチ。桧材を用いた寄木造で、漆下地に切金文様を混えた彩色を施している。像の構造は（木寄せ基本図、参照）まづ2本の縦長の角材が用意され（A. B）、これが頭軀部を通した前半部を構成する。ついでその背面に角材2材（C. D）が添えられ、軀部の後半部を形成する。この2材の上方、つまり像の後頭部に当る部に1材（E）がのせられ、また両腰脇部に各1材（F. G）が添えられる。こうして木取られた7箇のブロックから像の根幹部が彫出されるが、左脚部はその足柄を含ん



広目天像木寄せ基本図

で A 材から彫出され、右脚及び足柄は B. G 材の下半部に彫出され、背面に長く垂れる裳裾部は、F. C. D. G 材より彫出されている。像は荒彫り段階に至り、内削りが施された所で、頭軀部材 (A. B) の頸筋の所にノミを入れて頭部と軀部とを割り離し、また両脚部も袴のくくりの所に下からノミを入れて、両脚を一旦軀部から割り離す割り矧ぎの手法がとられている。こうして造られた像の根幹部に対し、さらに髻を別材で作し、両手は肩・臂・手首で矧ぎ、両杳先を矧付け、腹前の獅嚙、天衣垂下部(後補)などを矧付けている。このような構造は当代の天部形像に共通のものであるが、その内削りは巾広の丸ノミでザングリとあら目に削られ、肉厚で、寄木造の像としては像高に比して重量も重い。また当代好んで用いられた玉眼嵌入の手法を本像では用いず、彫眼とすることも注意される。像身には全面にサビ漆を塗って地固めを行い、これに彩色が施されているが、現存のものは、そのあら目の切金文様と共に造像当初のものではなく、後世の補彩と認められる。

3.

前述の通りこの広目天像の左足柄内側に刻銘がある。これは柄の側面前半部に「巧匠快慶」<sup>(種子)</sup>「安阿弥陀仏」と二行に刻まれたもので、特に巧匠快慶の四字は快慶の自署と認められるもの、例えば、奈良西方寺及び岡山東寿院の阿弥陀像足柄銘などと字形がよく似通うが、その一点一画にみられるくせの強い抑揚には、快慶の自署とはやや相違する趣があり、また鎌倉時代の筆蹟と素直に認めることも躊躇される。おそらく、この場所に記されていた墨書銘（快慶は始んで足柄部に銘を残している）が消えかかったので、後世そのまま刻み起したものではないかと思われる。（拓影参照）



広目天左足柄内側刻銘拓影

像内に納入の文書は、縦最大13.8センチ、全長97.7センチ、2紙継、薄手の斐紙で、これに梵文陀羅尼を35行に亘って墨書し、奥に「比丘 [ ]」「[ ] 年六月 [ ]」「[ ] 天奉 [ ]」と記している。この大紙片に小紙片1紙（縦4.4センチ、横10.9センチ）が巻きこまれていた

が、これには種子等が7行記され、最終行に「 寿丸 」とあった。これらをさらに包紙に巻きこみ、像の首柄部の穴から頭部内に無雑作に差しこんであったものである。いづれも現状は虫蝕損傷が著しく、判読出来ない箇所も多いが、書体は鎌倉前期のものと認められ、簡単ながら造像時に願者あるいは結縁者が記して籠めたものと判断される。

所で問題はその包紙にある。これは縦25センチ、横15.8センチの1紙で「十二日に……」と記す消息の断片を利用したもので、その片面左隅に「安阿弥陀仏御 」との宛名と、差出人と思われる「 阿弥陀仏」の墨書がある。安阿弥陀仏とはいうまでもなく仏師快慶が未だ僧綱位を受けない前の自称である。

なお快慶が安阿弥陀仏を号した無位時代は建久三年乃至建仁三年頃(1192-1203)と考えられるので、大紙片の奥書に記す「  年」は、建久年次あるいは建仁年次を示すものと判断して宜ろしかろう。

以上の資料から類推してみるならば、この広目天像は快慶無位時代の彼の造像と考えることが出来、造像時、願文の紙片を籠めるに当って、彼が「 阿弥陀仏」から受けとっていた彼宛の消息をその包紙として利用したものと判断のてほぼ誤まりないであろう。

#### 4.

それでは像自体の表現はどうであろうか。右手に卷子、左手に筆を執り、瞋目して口を閉ぢる面相は頤を引き、腰を左に捻り、夜叉を踏まえて立つ姿は、みるからに鎌倉彫刻の特色顕著なものである。忿怒する面相の筋肉のひきしまった写実味豊かな表情、あるいは力強く腰を捻って上半身を反り身とした脛部などは骨格もたくましく、自然味に勝る動勢をよくとらえながら節度のある均衡を保ち、一種清新の気を蔵した堂々たる趣を示している。こうした特色は、正しく鎌倉初期の正統を継ぐものであろう。面相に隆起する筋肉の表現構成は、建仁三年(1203)運慶・快慶等の合作とさ

れる東大寺南大門金剛力士像中の吽形のそれと酷似していることが注目され、またやや鈍重感を否めないが、厚手に翻転する両袖や裳裾のさばきは、たとえば同じく快慶無位時代の一作、建仁年中(1201-1204)造立の安倍文殊院・文殊五尊像中の善財童子像のそれと軌を一にするものであることが注意される。総じて彫技は熟達したもので、細部に至るまで几帳面な程によく刻みこなし、特に両腕付根部に配した獅嚙の彫法などは出色のものである。

このような本像の様式は、未だ彫刻的量塊性に重点のおかれた快慶前半期(つまり無位時代の)諸作例に共通のものであり、ほぼ間違いなく、本像を快慶の制作と判断してよいものと思われる。

因みに水野敬三郎氏は、近時、仏像の耳の表現や彫り癖に作家の特色が顕著にあらわれる点に着目して、耳の彫法からみた快慶作品の検討を行っているが、<sup>2)</sup>氏の説によって、本像の耳を観察すると、正しく快慶の作と考えることが出来る。なお、本四天王像の他の三軀については、現状では快慶の作であるとは断定し難く、木寄せ法や内削りの方法、あるいは作行にもやや差異が認められるが、本来一具同時の作とは考えられるので、今は、快慶一門の他の作家のものかと想定しておきたい。

仏師快慶の遺作は現在その確かなものだけを考えても二十数例が<sup>3)</sup>数えられ、その造像年次も最古の文治五年(1189)弥勒菩薩像(ボストン美術館)から嘉禎二年以降(1236~)造像の阿弥陀如来像(奈良・西方院)に至る四十数年の巾をもっている。しかしこれら遺作の内、忿怒相のものは著しく少なく、前記東大寺金剛力士像の他には京都・金剛院に執金剛神と深沙大將像が遺されているだけであり、ここに典型的な忿怒相の天部形像の一例を快慶の遺作に加え得た訳である。

5.

高野山には他に快慶の作品としては、建久末年(1199)頃、明遍創建の蓮花三昧院の阿弥陀如来像(現、遍照光院蔵)、正治二年(1200)金剛峯寺孔雀堂の孔雀明王像、承久三年(1221)頃の光台院阿弥陀三尊像などがあり、快慶の野山での活躍のあとをしのぶことが出来る。

なお本四天王像の夜叉及び框座の大部分は天保十五年(1844)の補作であるが、それらに記されている墨書銘<sup>4)</sup>によると、この四天王像は高野山六角経蔵に安置のもので、他の二軀の脇士と共に天保十五年に修理が行われたことを知り得る。また『紀伊続風土記』高野山之部卷四、六角経蔵の条によると、この経蔵の本尊は説法相の釈迦如来像で、その周りの壇上に四天王四軀と深沙大将及び執金剛神の六尊が安置され、それらはすべて「安阿弥」つまり快慶の作であると記している。

6.

日本彫刻史上、個人作家として快慶程に多くの作品を今に遺した仏師はまれであろう。ここ十年程の間にも、従来確認されている遺品の他に京都松尾寺の如来坐像(安阿弥時代のもの、現在京都国立博物館出陳中)、随心院の金剛薩埵像(晩年のもの<sup>5)</sup>)などが確認されている。しかもなお将来遺品確認の可能性もある。既にまとめられている秀れた総合的研究<sup>6)</sup>にまた一つ新資料を加え得たことをここに慶びとするものである。

(文化庁文化財保護部 文部技官)

注 1) 昭和 40 年度指定文化財修理報告書・美術工芸篇. 56頁, 昭和 42 年. 文化財保護委員会刊.

2) 水野敬三郎氏「快慶作品の検討」美術史 47 号所収. 昭和 38 年.

3) 確実な快慶の作品については、諸説があるが、これらの内には筆者が未だ精査する機会を得ていないものも二、三あるので、その件数を確実に記さなかった。



高野山六角経蔵の四天王像について

- 4) 注1書 61～63 頁参照.
- 5) 西川杏太郎 「快慶作金剛薩埵像」国華 888 号所収, 昭和 41 年.
- 6) 毛利久氏 「仏師快慶論」昭和 36 年, 吉川弘文館刊.  
小林剛氏 「巧匠安阿弥陀仏快慶」昭和 37 年, 奈良国立文化財研究所学報.